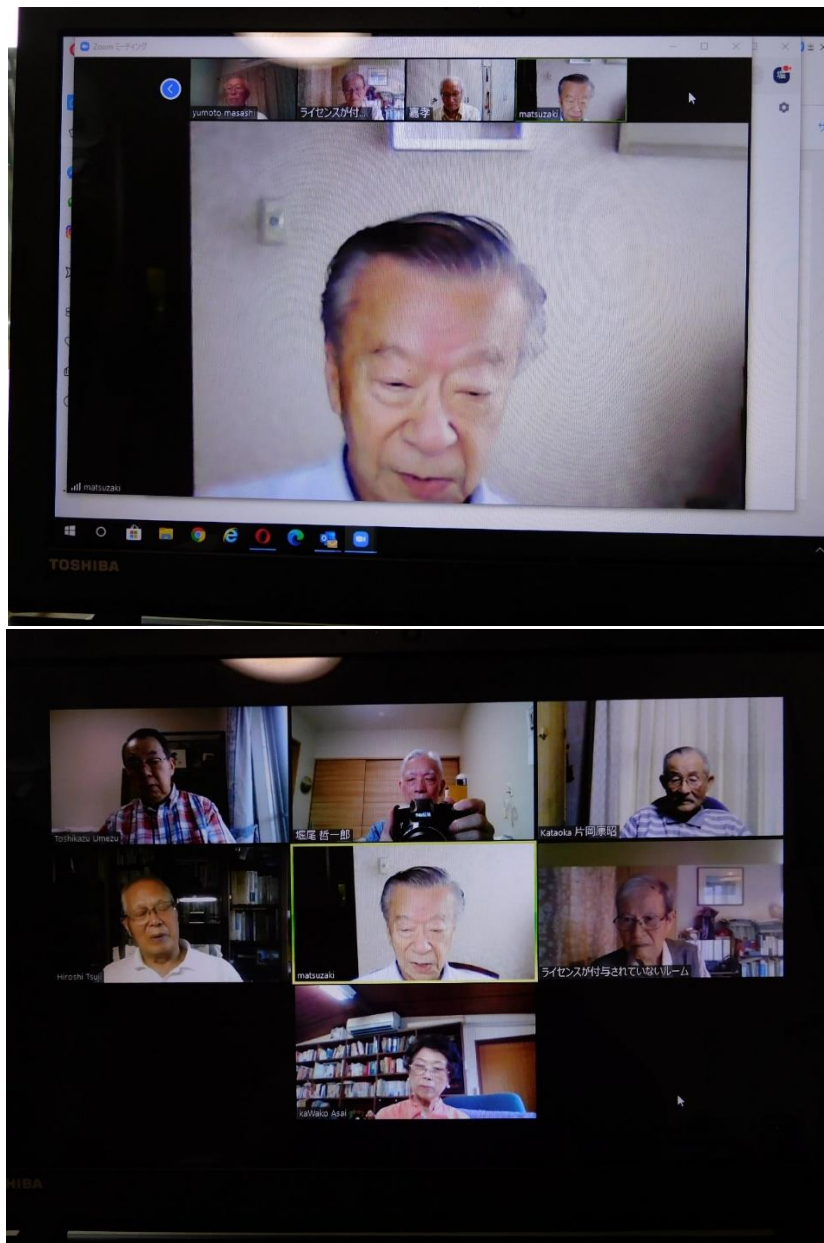


スマイル会 7月例会

2020年07月09日に例会として初めてWEB MTGを開催しました。

「蒙古軍壊滅の真実（神風によるものか?）」と題して松崎昇氏が講師を務められました。



スマイル会資料(2020.07.9.)

蒙古軍壊滅の真実（神風によるものか？）

文永（11年）、弘安（4年）の二度にわたる蒙古帝国の日本襲来は、神風によって蒙古の船隊が全滅したことによって失敗したというのが、これまでの一般的解釈であった。

しかし、最近（21世紀）になって、暴風が蒙古軍敗退の主原因ではないという説が広く信じられるようになった。その理由は、

文永の役（1274年）であるが、二万七千の蒙古軍は、対馬、壱岐を経て博多湾に上陸、戦法で劣った日本軍は、太宰府まで敗走した。その夜（太陽暦で11月26日）に蒙古軍は船上に引き上げた。その直後に暴風が襲来、蒙古軍は、船と兵員に多くの損害を受けて高麗に帰ったというのが、これまでの解釈であった。

現在の通説では、日本軍が太宰府まで撤退したのはそのとおりだが、戦闘は1日ではなく10日くらいかかった。また、暴風が吹いたとしても、台風ではなく、玄界灘の冬の嵐というべきものであった。嵐という程度のもので、これが続くと本国に帰れなくなるので、蒙古軍は引き上げたのである。

七年後の弘安の役（1281年）では、蒙古軍は、十四万人余の大軍（実際は多くて300艘、2万人程度か）で押し寄せた。しかし、この時、日本側も準備を整えていて、博多湾には、石の防塁、海中の乱杭などを備え待ち構えていたので、蒙古軍は博多湾自体に上陸できず、志賀島に上陸したが膠着状態となる。（博多湾と志賀島の位置関係は地図を参照）

蒙古軍は上陸できない状態で、一ヶ月も空費する。8月22日の夜にいたって暴風雨となり、船の大半が沈み、兵も多く溺死した。時期的に見て台風であったと考えられる。このような状況で襲来した台風はいわば当然の自然現象であって、これを超自然的な現象とはいえない。上陸を果たすために一ヶ月も空費したことによって台風シーズンが到来し、当然のごとく襲来した台風によって大被害を受けたのである。そして、一ヶ月間、上陸を阻止された原因は、日本側の周到な準備と善戦にあった。

以上の通り、蒙古軍敗退の主原因は神風であるというのは、文永、弘安いずれの戦役でも無理がある。

では、なぜ、神風説が、これまで大手を振ってまかり通ってきたのか。

1. 学者が、いわゆる史料批判（特に文献批判）を怠ってきた。それによって、『八幡愚童訓』という書物が唯一の文献として、その内容が無批判にそのまま信じられてきた。しかし、同書は、八幡信仰の宣伝、布教のために作られたものである。歴史的事実を記述したものと取るのは、間違いであった。
2. 歴史資料の整理が進んでいなかったため、八幡愚童訓以外の文献の調査が困難であったという事情もある。（大日本史料が刊行されていなかった。）
八幡愚童訓以外に、もっと信頼できる資料はある。勘仲記、蒙古襲来絵詞である。
3. 神風説は、昭和初期以来益々増大してきた神国思想に合致するものであるため、これを否定する説は、圧迫、無視されてきたと思われる。

これまでの神風説が退けられた理由

1. 八幡愚童訓は、作成の動機・時期、著者、内容等から見て、これを歴史資料と見ることは出来ない。
2. 作成の動機・時期、著者、内容等から見てより信頼できる、八幡愚童訓以外の文献が発見され、そこからより信頼できる歴史事実が知られるようになった。
3. 現地の地勢その他の状況、軍隊の移動、その他の現実的考察などから、より信頼できる事実の推定が出来るようになった。

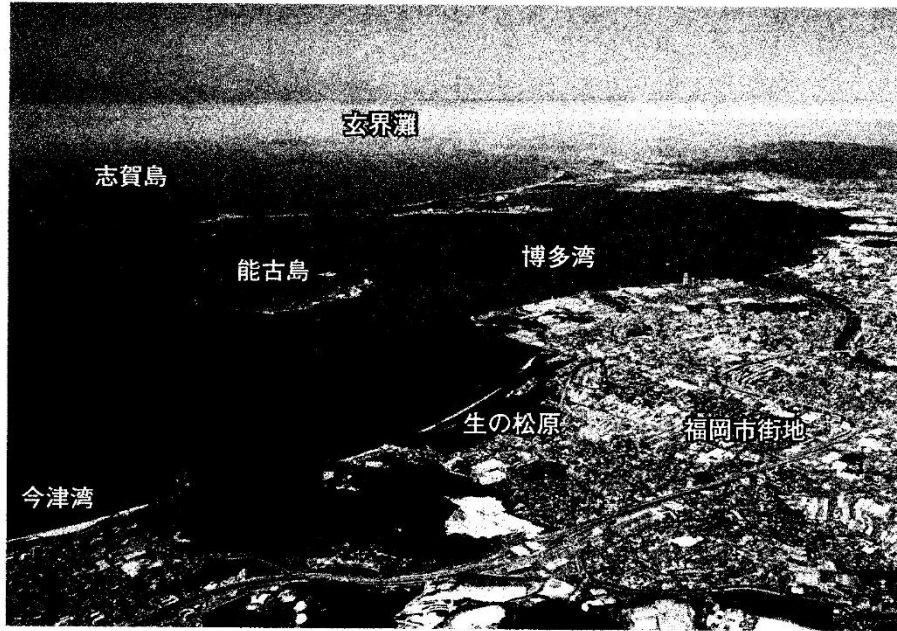
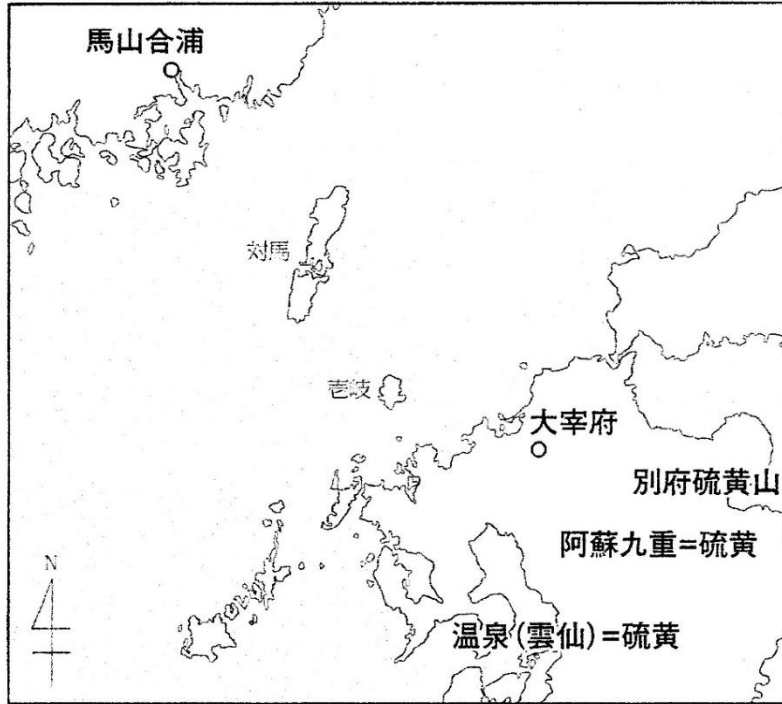


図4・12 空からの志賀島、能古島、生の松原 (福岡市史・編纂室提供)



図4・13 生の松原から志賀島は10キロ弱、鷹島まではその10倍以上はあった。途中の碇泊が必要である。

「蒙古襲来」服部英雄著 山川出版社刊より引用



硫黄を求めて